

友人関係における欲求，友人の行動， 危険度認知が大学生のリスクテイキング 行動に及ぼす影響

小 塩 真 司*

問 題

青年のリスクテイキング行動 (adolescent risk-taking behavior) とは、直接的あるいは間接的に、若者の幸福、健康、さらにライフコースまでもを危険にさらしうる行動のことである (Jessor, 1998)。飲酒や喫煙、無謀な運転といったリスクテイキング行動は、人生段階の中でも青年期に始まり、青年期に顕著に見られる行動であると言ってもよいであろう。特にわが国では、暴走行為や飲酒によるトラブルなど、青年期後期にあたる大学生のリスクテイキング行動が注目されることも多いように思われる。

小塩 (2001) は、大学生を対象とした、彼らが日常的に行う可能性のあるリスクテイキング行動の指標となる尺度を作成している。小塩 (2001) は、まず大学生が日常的に行う可能性があり、かつ危険を伴うと認識されている行動を収集し、21 の行動内容にまとめた。そして大学生 523 名に対して調査を行い、最終的に 12 の行動内容からなる大学生用リスクテイキング行動尺度 (Risk-taking Behavior Scale for Undergraduates ; RIBS-U) を構成した (Table 1)。そしてこの尺度の再検査信頼性は十分であること、この尺度得点が高い大学生は他のリスクテイキング行動にも従事する傾向があること、この得点が高い大学生は交通事故や周囲の大人から注意される傾向にあり、大学の講義への出席率も低い傾向にあることなどを明らかにしている。

* 人文学部助教授—発達心理学

Table 1 RIBS-U の項目内容

項目内容
1. たばこを吸うこと
2. 電車への駆け込み乗車
3. 信号無視をすること
4. うそをつくこと
5. 飲酒運転をすること
6. ずる休みをすること
7. 大量の酒を飲むこと
8. 自動車やバイクでスピード違反をすること
9. 約束を破ること
10. バチンコや競馬などの賭け事をする
11. 授業や待ち合わせに遅刻すること
12. 飲み会などでイッキのみをすること

本研究では、このような青年のリスクテイキング行動に影響を及ぼす要因について、以下の3点から検討を行う。

青年のリスクテイキング行動に影響を与える第1の要因として、そのような行動をする友人の存在があげられる。例えば Welte & Barnes (1987) は、薬物使用頻度の高い友人の存在が喫煙行動を促進することを示している。このように周囲にリスクテイキング行動を行う友人が存在し、その友人のリスクテイキング行動を認識することは、青年本人の行動にも影響を及ぼすと考えられる。

第2に、そのような友人の行動のとらえ方には、友人との関係のあり方が影響すると考えられる。例えば Thorlindsson & Vilhjalmsson (1991) は、仲間や友人との結びつきが強い青年ほど飲酒行動をする傾向にあることを示している。しかし、友人との関係のあり方が直接的にリスクテイキング行動に結びつくと考えるのは難しい。そこで本研究では、友人関係における欲求の側面に注目する。榎本 (2000) は青年期における友人関係の発達的变化に及ぼす影響として欲求の側面に注目し、友人と互いの個性を尊重する関係を

望む「相互尊重欲求」、友人と一緒にいたり、遊んだり友人との親しい関係を望む「親和欲求」、友人との同じ行動や同じ趣味を望む「同調欲求」という3つの欲求を見いだしている。このような友人関係の欲求の側面は、具体的な友人とかかわる行動に影響を及ぼすと考えられる。例えば友人と同調したいという欲求をもつ者は、そうでない者よりも友人の行動をより観察するであろう。従って、このような友人関係の欲求の側面は、友人のリスクテイキング行動の認識のし方に影響を及ぼすと予想される。

また第3の要因として、その行動の危険度の認知があげられる。一般的に、危険と認識される行動の生起頻度は低く、そのような行動に従事する友人との接触頻度も低くなると予想されるからである。また例えば Lee, Su, & Hazard (1998) は、危険度の認知がマリファナ使用頻度に負の影響をもつことを示している。このように、リスクテイキング行動をより危険だと認識する者は、そのような行動の頻度がより低くなると考えられる。

以上のことから、本研究では、友人の行動、危険度の認知、友人に対する親和欲求が大学生のリスクテイキング行動に及ぼす影響について検討する。

方 法

1. 第1回調査

(1)調査時期・手続

以下の内容の質問紙を、大学生 460 名（男性 228 名、女性 232 名、平均年齢 19.84 歳）に対して実施した。調査時期は 2001 年 6 月であった。

(2)調査内容

a. 友人のリスクテイキング行動 小塩（2001）が作成した大学生用リスクテイキング行動尺度（RIBS-U）の 12 の行動について、最も親しい友人が普段どの程度行うかについて、「全く見たことがない（1点）」から「よく見た（4点）」までの 4 件法で尋ねた。

b. 危険度の認知 RIBS-U の12の行動について、もしその行動をしたら、各行動が自分自身に悪影響を及ぼす危険性がどれくらいあると思うかを、「全く危険ではない（1点）」から「非常に危険である（4点）」までの4件法で尋ねた。

c. 友人関係の欲求の側面 普段友達づきあいの中でどのように感じているかについて、榎本（2000）が作成した友人関係の欲求側面を測定する尺度23項目を「まったく思わない（1点）」から「とてもよく思う（6点）」までの6件法で尋ねた。

2. 第2回調査

(1)調査時期・手続

調査1の約1カ月後に、講義時間を利用し第2回目の調査を行った。被調査者の照合は学籍番号により行われた。最終的な分析対象は大学生408名（男性196名、女性212名、平均年齢19.79歳）であった。

(2)調査内容

a. リスクテイキング行動頻度 RIBS-U の12項目について、普段どれくらい行うことがあるかを「まったくしない（1点）」から「よくする（4点）」までの4件法で尋ねた。

結 果

1. 各尺度の分析

(1)友人のリスクテイキング行動と危険度認知

友人のリスクテイキング行動および危険度認知について、それぞれ12項目の平均値を算出し、友人のリスクテイキング行動得点（以下、友人行動）、危険度認知得点（以下、危険認知）とした。友人行動の平均値は1.95 (SD .61)、危険認知の平均値は2.94 (SD .43) であった。 α 係数は友人行動で.84、危

危険認知で.78であった。男女差の検討を行ったところ、友人行動では女性よりも男性の得点の方が高く（男性平均 2.18, SD .04；女性平均 1.74, SD .50； $t(370.3)=7.67$, $p<.001$ ），危険認知では有意な男女差はみられなかった（男性平均 2.90, SD .49；女性平均 2.98, SD .37； $t(361.1)=1.75$, $n. s.$ ）。

(2)友人関係の欲求の側面

逆転項目の処理を行い、友人関係の欲求の側面 23 項目に対して因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行ったところ，先行研究とはほぼ同様の 3 因子解を得た（Table 2）。そこで先行研究に従い，第 1 因子を親和欲求，第 2 因子を同調欲求，第 3 因子を相互尊重欲求と解釈した。なお，因子負荷量が.35 に満たない 1 項目は以降の分析から外した。次に，各因子に高い負荷量を示した項目平均値を算出することにより，相互尊重欲求得点（平均 4.60, SD .73），親和欲求得点（平均 4.69, SD .80），同調欲求得点（平均 2.90, SD .97）とした。 α 係数は相互尊重欲求で.81, 親和欲求で.86, 同調欲求で.85 と十分な値であった。男女差の検討を行ったところ，相互尊重欲求（男性平均 4.51, SD .70；女性平均 4.68, SD .75）と親和欲求（男性平均 4.53, SD .79；女性平均 4.83, SD .79）は男性よりも女性の得点の方が高く（それぞれ $t(406)=2.27$, $p<.05$ ； $t(406)=3.82$, $p<.001$ ），同調欲求は女性よりも男性の得点の方が高かった（男性平均 3.08, SD 1.01；女性平均 2.73, SD .90； $t(406)=3.70$, $p<.001$ ）。

(3)リスクテイキング行動頻度

2 回目調査において調査されたリスクテイキング行動頻度の 12 項目について項目平均値を算出し，リスクテイキング行動頻度得点（以下，行動頻度）とした。平均値は 2.03 (SD .48)， α 係数は.73 であった。男女差の検討を行ったところ，女性よりも男性の得点の方が高かった（男性平均 2.17, SD .50；女性平均 1.87, SD .32； $t(327.2)=7.31$, $p<.001$ ）。

2. 相関関係

各得点間について男女込みの相互相関を Table 3 に，男女別の相互相関を Table 4 に示す。友人関係の欲求の側面と友人行動では，男女込みと女性では

Table 2 友人関係の欲求の側面の因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

	I	II	III
親和欲求			
友達と遊びたい	.81	-.07	.01
友達と一緒にいたい	.80	.06	.00
友達には一緒にいてほしい	.78	.15	-.02
友達には私と遊んでほしい	.66	.15	-.05
友達とは離れて一人でいたい*	.65	-.21	-.12
友達といることで安心感を得たい	.58	.04	.07
私は友達をほしくない*	.53	-.27	-.05
友達を頼りにしたい	.44	.14	.17
同調欲求			
友達と趣味や好みが一致したい	.04	.80	.02
友達には私と同じ行動をしてほしい	.05	.78	-.06
友達には私の趣味や好みと一致してほしい	.00	.76	.02
友達には私の行動や私の言うことに従ってほしい	-.25	.74	.08
友達と同じ行動をしたい	.19	.64	-.15
友達の行動や友達の言うことには従いたい	-.10	.52	.06
相互尊重欲求			
友達には私に対して自分の意見をきちんと行ってほしい	-.04	.02	.74
友達とはお互いに言いたいことを言い合いたい	.08	-.02	.70
友達には私の悪いところを言ってほしい	.00	-.07	.66
友達には私の意見をきちんと言いたい	-.08	.06	.64
友達の悪いところを伝えたい	-.13	.05	.61
友達には何でも話したい	.35	.06	.40
友達には私の個性を尊重してほしい	.00	.04	.38
友達といることで私自身を成長させたい	.29	-.07	.38
削除項目			
友達の個性を尊重したい	.13	-.20	.33
因子間相関			
I	—	.29	.47
II		—	-.09
III			—

* 逆転項目

Table 3 男女込みの相互相関

	相互尊重	親和欲求	同調欲求	友人行動	危険認知	行動頻度
相互尊重	—					
親和欲求	.48***	—				
同調欲求	-.05	.25***	—			
友人行動	.07	-.01	.23***	—		
危険認知	.21***	.16**	.01	-.10*	—	
行動頻度	.06	.01	.10*	.50***	-.22***	—

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 4 男女別の相互相関

	相互尊重	親和欲求	同調欲求	友人行動	危険認知	行動頻度
相互尊重	—	.45***	-.01	.16*	.25***	.13
親和欲求	.48***	—	.24***	.09	.21**	.09
同調欲求	-.06	.35***	—	.14*	-.01	.06
友人行動	.09	.03	.21**	—	-.09	.46***
危険認知	.17*	.09	.06	-.05	—	-.19**
行動頻度	.07	.08	.03	.37***	-.22**	—

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

左下：女性 (n=212), 右上：男性 (n=196)

同調欲求のみが友人行動との間に有意な正の相関を示し (男女： $r = .23$, $p < .001$; 女性： $r = .21$, $p < .01$), 男性では相互尊重欲求と同調欲求が友人行動と低い値ではあるが有意な正の相関を示した (それぞれ $r = .16$, $r = .14$, とともに $p < .05$)。友人関係の欲求の側面と危険認知では, 男女込みと男性で相互尊重欲求, 親和欲求との間に有意な正の相関がみられたが (男女： $r = .21$, $p < .001$; $r = .16$, $p < .01$; 男性： $r = .25$, $p < .001$; $r = .21$, $p < .01$), 女性では相互尊重欲求のみが危険認知と有意な正の相関を示した ($r = .17$, $p < .05$)。友人関係の欲求の側面と行動頻度との関連は, 男女込みで同調欲求と行動頻度との間に有意な相関がみられたが ($r = .10$, $p < .05$), 低い値であった。友人行動と危険認知では男女込みで有意な負の相関がみら

れたがその値は小さく($r = -.10$, $p < .05$), 男女別では優位な相関はみられなかった。友人行動と行動頻度では男女ともに有意な正の相関がみられた(男女: $r = .50$, 男性: $r = .46$, 女性: $r = .37$, 全て $p < .001$)。危険認知と行動頻度では, 男女ともに低い値ではあるが有意な負の相関がみられた(男女: $r = -.22$, $p < .001$; 男性: $r = -.19$, $p < .01$; 女性: $r = -.22$, $p < .01$)。

3. パス解析

(1) モデルの設定

Table 3 および Table 4 の結果から, 分析を行うモデルとして, 友人関係の3つの欲求の側面が友人のリスクテイキング行動の認識の程度に影響を及ぼし, 友人のリスクテイキング行動の認識と危険度の認知が, 実際のリスクテイキング行動に影響を及ぼすという分析の始発となるモデルを設定した(Figure 1)。また Table 3 および Table 4 では, 危険度の認知は友人関係の欲求の側面のうち男女込みと男性で相互尊重, 親和欲求との間, 女性では相互尊重との間に正の関連がみられたが, 友人関係の欲求の側面が危険度の認知に影響を与えるとは考えにくいとため, 外生変数として扱うこととした。

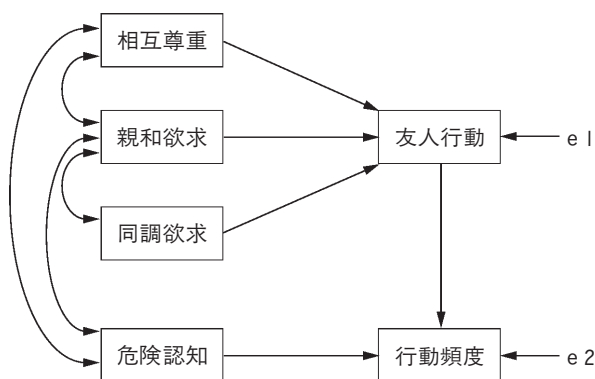


Figure 1 分析の始発とされたモデル

(2)モデルの分析

Figure 1 に示されたモデルについて、Amos (4.02) によって、男女で多母集団の同時分析を行った。分析によって得られた男女別のパス係数および重相関係数の平方を Figure 2 に示す。適合度指標は $GFI = .99$, $AGFI = .96$, $RMSEA = .02$ であり、このモデルはデータをうまく反映しているといえる。

男女ともに同調欲求から友人行動への正の有意なパス係数がみられ、親和欲求から友人行動へのパス係数は有意ではなかった。相互尊重から友人行動へのパス係数は、女性では正の有意な値であったが、男性では有意傾向を示すにとどまった。男女ともに危険度認知から行動頻度への負のパス、友人行動から行動頻度への正のパスがみられた。また友人行動から行動頻度へのパス係数については、男女で有意差がみられた ($p < .05$)。

考 察

本研究では青年のリスクテイキング行動に対して影響を及ぼす要因として、友人のリスクテイキング行動の認識、友人関係における欲求の側面、各行動の危険度認知を取り上げた。

各得点間の相関関係から、リスクテイキング行動の頻度は男女ともに友人の行動と正の、危険度の認知と負の関連を示していた。またパス解析の結果においても、友人の行動は1カ月後のリスクテイキング行動に正の、危険度認知は負の影響を示していた。先行研究 (Welte & Barnes, 1987; Lee, et al., 1998) では特定のリスクテイキング行動に注目し、友人の行動や危険度認知からの影響を明らかにしているが、本研究の結果はそのような影響関係が、より広範なリスクテイキング行動にもみられることを示唆しているといえるだろう。

また本研究では、友人関係の欲求の側面に注目し、リスクテイキング行動との関連を検討した。そして結果から、相互尊重欲求、親和欲求、同調欲求という3つの友人に対する欲求が、直接的にリスクテイキング行動の頻度に

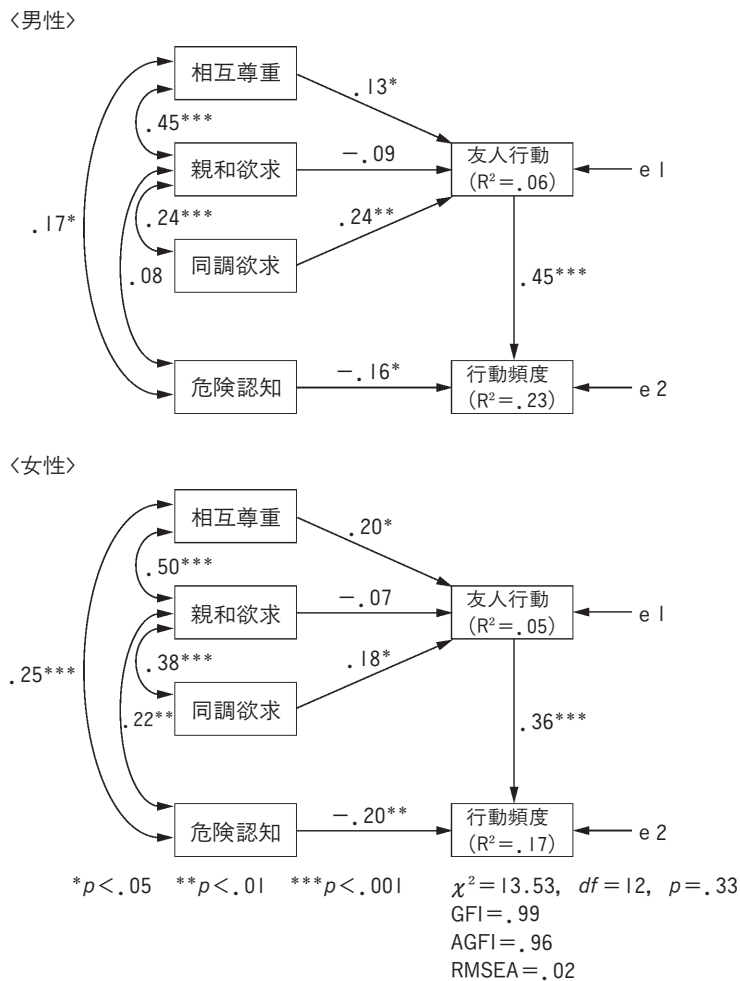


Figure 2 パス解析の結果

影響を与えるのではなく、友人の行動を媒介して影響を与えることが示された。特に Figure 2 の結果では、相互尊重欲求と同調欲求が友人行動に正の影響を示していた。ただし本研究で測定した友人行動は、現実の友人のリスク

テイキング行動というよりも, 友人のリスクテイキング行動をどの程度認識しているかを測定するものであった。従ってまず第1に, 互いの相違点を理解し, 互いに認めあうことを望む(榎本, 2000)ことを意味する相互尊重欲求が高いことは友人関係の中で相互理解を志向することから, また第2に, 互いの行動や趣味の一致を望む(榎本, 2000)ことを意味する同調欲求が高いことは友人の行動に注目しやすくなることから, 友人のリスクテイキング行動の程度をより認識することにつながると考えられる。ただし, 友人関係における欲求の側面については, 特に女性において危険度認知との相関関係がみられるなど, リスクテイキング行動との関連が不明確な部分もあるため, これらの関連については今後も引き続き検討を行う必要があるだろう。

Figure 2の分析では, 友人行動から行動頻度へのパスで男女差がみられた。この結果から, 女性よりも男性の方が, 友人のリスクテイキング行動からの影響を受けやすいことが示唆される。榎本(1999)は, 友人と遊ぶことを中心としたつきあい方である共有活動が, 中学・高校・大学を通じて, 一貫して女性よりも男性の方によくみられることを明らかにしている。本研究の結果はリスクテイキング行動という, 行動のひとつの側面に限ったものであるが, 女性よりも男性の方が, より友人や仲間を伴ってそのような行動を行う傾向にあることを示唆しているのかもしれない。このような友人集団とリスクテイキング行動との関連, そしてそこにみられる男女差の要因に関しても, 引き続き検討を行う必要があるだろう。

文 献

- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 榎本淳子 2000 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, 48, 444-453.
- Jessor, R. 1998 New perspectives on adolescent risk behavior. In R. Jessor, (Ed.)

- New Perspectives on Adolescent Risk Behavior*. New York : Cambridge University Press. Pp. 1-10.
- Lee, C., Su, Y., & Hazard, B. P. 1998 The contingent effects of risk perception on risk-taking behavior : Adolescent participative orientation and marijuana use. *Journal of Youth and Adolescence*, **27**, 17-27.
- 小塩真司 2001 大学生用リスクテイキング行動尺度 (RIBS-U) の作成 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **48**, 257-265.
- Thorlindsson, T. & Vilhjalmsson, R. 1991 Factors related to cigarette smoking and alcohol use among adolescents. *Adolescence*, **26**, 399-418.
- Welte, J. W. & Barnes, G. M. 1987 Youthful smoking : Patterns and relationships to alcohol and other drug use. *Journal of Adolescence*, **10**, 327-340.

(2003 年 4 月 25 日 受理)